

## 書評

## 住田 異義史之研究に就いて

稻葉 秀賢

本書は一異義史要、二異義史考、三論文、四、三帖和讃講叢の四部からできてゐる。その中、三帖和讃講叢は大正十五年夏安居の講本として發表せられ、その聲價既にかくれなきものである。そして本來は『教行信證之研究』に收載せられる豫定であつたが、都合で本書に附載せられたものである。従て本書としては前の三部がその主要部分を構成するのであつて、殊に先生が最後まで本書の公刊を拒まれたと序文にある如く、第三部の論文を除いて始めて公刊せられたものである。更に第二部の異義史考は先生の異義史研究の最初の稿案であり、その精要をまとめられたのが第一部の異義史要である。従て第一部と第二部は重複する箇所も多いが、相互に相補うものがあつて、先生の精緻な研究の跡を偲ぶことができる。之に加へて第三部には異義研究に關する先生の論文、未發表の原稿が收載せられ、先生の生涯に亘る研究成果にふれることができると共に、今更の如くにその學徳の深さを仰がずにはゐられない。

山上正尊師の序文に依れば、先生が「私の異義宗論史である。そして元祖門下の異流から始めるのは、後世の異義に關はりがあるから大切だ」と訓へられたとのことである。こゝに先

生の研究態度を知ることができる。然も先生がひたすらに公刊を避けられたのは、「一は謙虛な先生の性格として、只々學に誇るのではなくて、彌が上にも慎重を期されたに外はないけれども、亦以て幾多の首肯し得ぬ異義を構へ、或は私解を挾んで躰いた人々を哀憐し迎合するに忍びず、寧ろ愛敬の念すら持たんとして、差控へられた結果ではなからうかとさへ想到するのである」といふ山上師の言は如何にもと肯かれるものがある。

かくて異義史の研究は元祖門下の異流から始るのであるが、かくの如き異流のあらはれる源流は遠く平安朝の淨土教に起源するのであつて、元祖門下の多くが何らかの形で諸行を復活するのは、南都北嶺に於いて行はれた念佛が諸行念佛俱生するに基くことが注意せられてゐる。それ故に元祖門下の異流は元祖がひたすらに念佛往生の宗義を立てられたに對し、諸行を何らかの形で復活しようとした所に出發するのである。かうした觀點から、一念義・多念義、諸行本願義、鎮西義・西山義・時宗に就いてその立義や系譜に就いて、精細な研究がなされてゐる。而してこれまでは異義史の研究の序分に屬する。

まさしく異義と云はるゝのは、「眞宗一流の正意と傳承したまう所は、御本書六軸に蘊在して、所謂教行信證の四法を以て其規模とす乃至此義を教へ授くるを眞の知識と立て、之を如實に信行する者を眞の佛弟子と名けたまう。爾れば此旨に違する者をすべて異義と稱する事となる。列祖の聖典に簡破したまう者即ち是なり」と定義せられてゐる。かくて宗祖が關東から帰洛せられて以來、關東教團に於いてあらはれた異義として、有念無念の諍、一念多念の諍、誓願名號不同の計、慈信房善戀の

異計乃至は知識歸命の計が擧げられてゐる。この中特に善鸞の異計に就いては、幾多の資料の考證に基いて暗示に富んだ見解が示されてゐる。次に宗祖滅後の異義として、佛光寺空性房了源、越前三門徒の祕事法門（北國の異義）高田系の祕傳が擧げられ、次いで蓮師の中興と、その時代に行はれ、御文の所破の對象となつた一十劫祕事、二不拜祕事、三知識歸命、四無信稱名、五施物たのみに就いて注意せられてゐる。

從來異義異安心の研究として、公表せられたものは少くない。然しその異安心と稱せられるものゝ中心は多く蓮師以後、特に徳川期に於ける宗學の勃興以後、學匠の間に立てられた異義異解に置かれた如くである。従てその異義が如何なる背景の中に生まれたのであるかは必ずしも明瞭ではなかつた。こゝに本書の特色があるのであつて、先生は元祖門下から異義の流れが無關係に生起するのではなく、そこに常に出ずべくして出て來た筋道を辿つて、その特色を明確にうち出してゐられる。

かくて蓮師以後の異義として、特にくはしいのは異義史考であつて、一西吟の自性一心計、二法霖の一盆計、三長州妙光寺圓空の邪義、四一往再往論、五下總求馬の知識歸命、六三業意業の諍論に就いて論ぜられてゐる。この中特に注意せねばならぬのは、三業意業の諍論であつて、所謂西派に於ける三業惑亂は西本願寺の存立を危くするほどの大問題となつたと共に、それはまた種々の異義を輩出する源泉ともなつたのである。それ故に本書にあつては、功存の歸命辯に就いて述べると共に、それが東西兩派に於ける諍論の種となることを説きその三業歸命の由來は、たのむ年月時處の覚えがなければならぬとすることか

ら起り、それがまた意業づのり、三業づのりの異計となることを注意してゐられる。そして三業歸命の亞流として悲歎謬解鈔、江戸並に京都の祕事が述べられてゐる。而して三業歸命と反對に法體をつのるのが所謂法體づのりであつて、この法體づのりとして、公嚴、龍山、是海、尾州五人男、加州法論、越後の頓成、三類の法體、機深信、たのみ嫌ひの三種に就いて述べられてゐる。次に口稱づのりの計として、一念九念の計、稱名願體論、たのみ嫌ひ、信行並起の計、法體募りの口稱計、佛恩報謝を無みする計、法體所行についてつのる計、三願轉入についてつのる計、その他を擧げてゐられる、而してこれら近世の異義について、異義史要では、近世異義概要として、自性一盆に濫する計、能歸づのりの計、法體づのりの計、口稱づのりの計、其他に要約せられ、又異義史考にあつても、蓮師以後の異義再檢として、法性一盆計、能歸づのりの計、法體づのりの計、その他として、凡ゆる近世の異計を網羅せられてゐる。この外、論文として十四の論考が載せられ、先生の倦まざる研究の跡を偲ぶことができる。

以上は本書の概要であるが、それだけで本書が如何に廣くしかも系統的に、眞宗教學史の上にははれた異義を網羅せられてゐるかが解るであらう。先生の該博深遠な學風に就いては今更云う必要もないのであるが、先生の著作に接しつゝこの學恩に頭の下る點がいろいろと感ぜられる。まづ第一に先生の行文が極めて簡潔であつて、無駄な言葉がなく極めて精練せられてゐることである。それ故に初學のものには取りつきにくい點もあるけれども、我々の最も學ぶべき點であると思ふ。第二に行

文は簡潔であるけれども、その背景に先生の精細な研究の深さがにじみ出ると共に、凡ゆる史料が涉獵せられ、その典據と所在が一々明示せられてゐる。これは後に續くものにとれば多量の便益を興へるか測り知れないものがある。そして先生はこれらの資料を單なる羅列でなしに、そこに自らなる結論を暗示しながら、獨斷に陥るような結論を下されたことがない。考うべしといふ語が隨處に見られるのも先生の學風の一であるが、それに依て我々は常に問題を興へられる。問のない所に答のあるべきはずはないので、問が出されたといふことは、答が用意され、暗示せられてゐることである。かうした意味で本書は長い眞宗教學史に於ける異義史跡をつける大きな答であると共に問でもある。先生が我々にのこされた問を以て、新しい課題に答へてゆくところにこそよく先生の學恩に報ゆる道があることを思はずにはゐられない。

## 新刊紹介

王本願論——本論篇——

加藤 佛 眼 著

著者は、先に『第十八願の研究』及び『王本願論』序論篇を發表していられるが、それらをうけ、本論として整へられたものが本書である。著者の意圖は序文に窺える如く、近代學的眞宗學の體系的組織という課題に答えようとするものである。即ち純粋宗教としての佛教の宗教的根源である第十八願の深義を佛敎學及び淨土敎諸宗義等に關する蘊蓄を驅使して、近代的表現により微細な點に互つて詳細に論證せられている。

本書の構成は總論と別論とより成り、前二書の内容を總論として要約し、別論に於て大行論——乃至十念の研究——、大信論——本願三信の研究——、證益論——若生者の研究——を以て王本願論を開展されている。此は尋いで出される典籍篇が待たれることではあるが、最近の眞宗學界として稀にみる好著である。著者の多年の

勞を謝し、宗學に關心をもつ凡ての人に  
とつて必携の書であり、敢て江湖の閑談  
を薦める。(京都・永田文眞堂刊・A 5  
判五七四頁 價 一、三〇〇圓)(日井)

日本曆學史概説

荒木 俊 馬 著

戰時中(昭・18・7)山口書店より出版せられたものを、このたび再刊したものの。あらたに補正をくわえ、平易な文章にしている。わが國固有の曆より説きはじめ、中國曆遵用時代の變遷、西洋科學受容による國曆獨立時代より、明治の改曆にいたるまでの経緯を、文化史的觀點にたつて敘述したところに、その特異性がある。(昭和三五・二・一〇、恒星社厚生閣發行、B 六判、二一七頁、定價三〇〇圓)

(鈴木)